

高校時代の思い出<sup>(※1)</sup>高普第8回卒 西郷 庸子<sup>(※2)</sup>

からたちの垣根や木々、植込みのある緑豊かな相馬高等学校に入学したのは、今から 40 年も前のこととなる。当時の校舎は老朽化が激しく、壁が落ち腰板があちこち引きはがされたオンボロの状態にあった。

いまにも朽ち果てそうな校舎の中での学習ではあっても、若さとエネルギーに満ち溢れた青春の一時期を精一杯におう歌することができたように思う。

入学して2か月が経ったある日「生徒会総会」が開かれるということで講堂に集合した。議題はたしか「部活費の活用について」といったものだったと思われるが、一部の部活が不正に費用を使用したとか、部費がかかりすぎる部や顕著な活動のみられない部は廃部にすべき等々、先輩が激論をたたかわす姿に時間のたつことにも気づかず耳を傾けていて、総会が閉会となったのはあたりが暗くなった頃であった。電灯のない真暗な教室を出て、ようやく月の上りはじめた田舎道を空腹と心細さを、がまんしながら家路に着いたことが今も鮮明に思い起こされる。

当時私は、飯豊から一里ばかりの道のりを下駄ばきで徒歩通学をしていた。道路は砂利道で、大雨が降ると決まってまわりの田や堀から水があふれ冠水した。バスは1日2往復程度あったが徒歩か自転車が交通手段の主力であった。たまに荷運びを終えて空になった馬車の荷台に便乗させてもらうのが楽しみの一つであった。夏休み中に自転車になんとか乗れるようになり、父の男物の重い自転車を借りて通学した。

秋に全校生でのピクニックが催され、徒歩と自転車の二手に別れて「立石鍾乳洞」へ向かって出かけた。私も覚えたての自転車で参加し、何とか目的地に着くことができた。立石では、洞内を見学したり周囲の山を散策したりと楽しいひと時を過ごすことができた。

2年生だったと思うが、修学旅行が実施されることとなった。種々の都合で旅行に参加できない者が1クラス弱程あったため、残留組として授業が行われた。その時の授業の内容は殆ど記憶に残っていないが、旅行に参加できなかったという悲しみや羨みを感じることなく、それなりに毎日を楽しんだ気がする。

3年生最後の期末試験の時、学校当局の計らいで、試験の3日間だけ新築途上の校舎への立ち入りが許され、机と椅子をかかえて3階の教室に入った。教室の一隅に設置されたスチーム暖房の器機に触れては、なんとなく温もりを感じた気分を味わったものである。3日間の試験も済み、机や椅子を元に戻したあと新校舎の検査が無事に済むようにと心をこめて床をみがいた。

振り返ってみると、高校時代の3年間は変則的ではあったが、小学4年から大学終了まで全て共学の学校で学ぶことができたことは、性別の違いによって、特別卑屈になったり、肩ひじを張ったり、また必要以上に対抗心を燃やしたりすることもなく過ごすことができた。職場の中でも、人間としての能力を精一杯に発揮することに主眼をおいて生活することができたのは、相馬高校で学んだことが私の人生の大きな支えとなっていたのではないかと思っている。

(※1) 創立百周年記念誌『相中相高百年史』(1998(平成10)年7月6日発行) 第四部「思い出の記」より。

(※2) 昭和31(1956)年卒、飯豊出身。